

水無月祓

佐阿弥作

季は	地は	狂言	ワキ
シテ	妻（狂女）	里人	夫
六月	山城		

「是は下京辺に住居する者にて候。我さる子細あつて播磨の国に下り。久しく室の津に逗留の間。相馴れし女の候ふに都に上りなば。必ず迎妻となすべき由堅く契約申して候。されば此程室の津へ迎へを遣はし候ふ処に。彼女居候はぬ由申し候ふ間。今は尋ぬべきやうもなく候。又今日は名越の祓にて候ふ程に。賀茂の明神に参詣申し。彼逢瀬をも願はゞやと存じ候。

狂言
「是は此あたりに住居仕る者にて候。今日は水無月祓にて候ふ程に。糺へ参らばやと存じ候。

ワキ詞
「なふ是なる人は糺へ御参り候ふか。某も御供申し候ふべし。

狂言
「見申せば都の人にてありげに候ふが。不知案内な

るやうに仰せ候ふよ。

ワキ
「仰せの如く都の者にて候へども。久しく田舎に候ひてまかり上り候ふ故かやうに申し候。

狂言「実にくさやうの事も候ふべし。さらば御供申し候はん。

ワキ「此頃都には如何やうなる珍らしき事か候。

狂言「御存じの如く都は広き事にて候ふ程に。いろいろ珍しき事も多く候。先づ此御手洗に参りて面白き事の候。

ワキ「如何やうなる事の候ふぞ。

狂言「若き女物狂の候ふが。巫のやうなる有様にて。水

無月祓の輪を持ち。人々に茅の輪の謂を申してくゞらせ候ふが。是非もなく面白う舞ひ遊び候。是を見せ申し候ふべし。

ワキ「さらば其物狂を見うづるにて候。

狂言「何かと物語申して参り候ふ程に。はや糺へ参りて候。御覧候へ殊の外群集にて候。彼物狂を待ちて見せ申し候ふべし。

シテ一聲「行く水に数書くよりもはかなきは。思はぬ人を思

ひ夫の。跡を慕ひて上り瀬の。清き流れや中賀茂の。御手洗川につどふ君。今日の名越の祓して。此輪越えさせ給へとよ。恥かしや人は何とも白波の。

地 「木綿しで掛くる御祓川。

シテ 「恋路をたゞす神ならば。

地 「などか逢瀬のなかるべき。

シテサシ 「実にや数ならぬ。身にも喻へは在原の。跡は昔に

業平の。此河波に恋せじと。掛けし御祓も大麻の。引く手あまたの人心。頼むかひなきかねことかな。とは思へども我は又。浮寐に明かす水鳥の。

下歌 「賀茂の河原に御祓して。逢瀬をいざや祈らん。

上歌 「夏と秋。行きかふ空の通路は。く。かたへ涼しき風ぞ吹く。御手洗川は濁れども。澄みてます賀茂の宮。誓ひ糺の神ならば。頼みをかけて憂き人に。めぐり逢ふべき小車の。賀茂の河原に着きに

けり。く。

狂言
「唯今申す女物狂はこれにて候。言葉をかけ輪の謂
を申させて聞し召され候へ。

ワキ詞
「承り候。さらば言葉をかけて謂を聞かばやと思ひ
候。如何にこれなる狂女。見れば茅にて作りたる
輪を持ちて。人々に越えよと承り候。名越の祓の
謂こそ聞きたう候へ。

シテ詞
「妾は狂人なれども。祓の謂を申して聞かせ参らせ

候ふべし。

ワキ
「さらば懇に語られ候へ。

シテ詞
「忝くも天照太神皇孫を。蘆原の中津國の御主と定
め給はんと有りしに。荒ぶる神は飛び満ちて。螢
火の如くなりしを。事代主の神なごめ祓へ給ひし
こそ。今日の名越の始めなれ。されば古き歌に。
五月蠅なす荒ぶる神もおしなべて。今日は名越の
祓へなるらん。

「さてさばへなすとは夏の蠅の飛びさわぐが如くに。
障りをなす神を云へり。かゝる畏き祓へとも。思
ひ給はで世の人の。」

ワキ 「祓へをもせず輪をも越えず。」

シテ 「越ゆればやがて輪廻を遁る。」

ワキ 「すはや五障の雲霧も。」

シテ 「今皆尽きぬ。」

ワキ 「時を得て。」

地 「水無月の。く。名越の祓へする人は。千年の命
延ぶとこそ聞け。輪は越えたり。御祓の此輪をば
越えたり。真如の月の輪の謂を。知らで人な笑ひ
そよ。もし悪しき友あらば。祓へのけて交へじ。」

身に祓へのけて交へじ。輪越えさせ給へや。此輪
越えさせ給へや。名を得てこゝぞ賀茂の宮。名を
得てこゝぞ賀茂の宮に。参らせ給はゞ。御祓川の
波よりも。此輪をまづ越えて。身を清めおはしま

せ。千早ぶる。神のいがきも越えつべし。もと來

し方の道を尋ねて。迷ふ事はなくとも。異方な通

り給ひそ。今日は名越の。輪を越えて参り給へや。

シテ
「神山の。二葉の葵年旧りて。

地
「雲こそかゝれ木綿鬘の。神代今世おしなべて。

今日は名越の。祓へなごめ静めて。心ぞ清き御祓
川の。波の白和幣。麻の葉の青和幣。何れも流し
捨衣の。身を清め心すぐり。本性になりすまして。

いざや神に参らん。此賀茂の神に参らん。

ワキ詞
「如何に申し候。此烏帽子を召されて。面白う舞う
て御見せあれと人々の御所望にて候。

シテ詞
「實にや臨時の祭には。かざしの花を賜はるとかや。

妾も烏帽子を打ち着つゝ。神の御前に狂はまし。
賀茂川の。後瀬しづかに後も逢はん。妹には我よ
今ならずともと聞く時は。祈る願も頼もしや。

ワキ
「實に濁りなき此神の。御心なれや賀茂の河。

シテ「今此水に影をうつす。舞の袖こそいろいろくの。

ワキ「心を種の手向草。

シテ「さるにても。よそには何と御祓川。

シテ「御祓川。水も緑の山陰の。

地「賀茂の宮居の御手洗川に。うつる面影く。

シテ「あさましや。もとより狂氣の我身なれば。

地「見しにもあらず自から。うつる姿は恥かしや。は
ごねも眉も乱髪の。賀茂の社へすごくと。歩み

よるべの水の綾。呉織くれぐと。倒れ伏してぞ
泣き居たる。

ロング地

「不思議やさては別れにし。其妻琴のひきかへて。

衰ふる身ぞ痛はしき。

シテ「声は其。人と思へど我ながら。現なき身の心ゆゑ。

たゞ夢としも思ひかね。胸うち騒ぐばかりなり。

地「實にや思へば影頼む。恵み普き室の戸に。

シテ「立つ神垣も隔てなき。

地
「御名も替はらぬ。

シテ
「賀茂の宮居。

地
「實にまこと有難や。誓ひは同じ名にしあふ。室君
の操を知るも。たゞこれ糺の御神の。御恵みなり
と同じく。ふたゝび伏し拝みて。妹背うちつれ帰
りけり。く。